

氏名	荒木 みさこ (アラキ ミサコ)
本籍	東京都
学位の種類	博士(学術)
学位の番号	博士 第10号
学位授与の日付	2014年9月4日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	家庭における食の健康教育に関する研究

論文審査委員	(主査) 桜美林大学特任教授	茂木 俊彦	
	(副査) 桜美林大学教授	森 和代	
		桜美林大学教授	鈴木 平
		早稲田大学教授	鈴木 晶夫

論文審査報告書

論文目次

序章.....	1
はじめに.....	1
研究の構成.....	3
第1章 問題の所在.....	6
第1節 先行研究.....	6
1-1 食育と食育政策について.....	6

1-1-1	日本の食行動の推移と食育について	6
1-1-2	諸外国の栄養指針と食育の取り組みについて	8
1-1-3	省庁や地域による食育の活動	11
1-1-4	日本における食育政策—その効果と課題—	13
1-2	幼児の食育の重要性について	15
1-2-1	乳幼児期の食行動について	15
1-2-2	幼児期の食行動について	16
1-2-3	児童期の食行動について	17
1-2-4	幼児の食育の重要性	18
1-3	幼児に対する保育所と幼稚園, および, 家庭での食育に関する活動について	20
1-3-1	保育所と幼稚園による食育について	20
1-3-2	家庭における食育と家族の役割	23
1-4	日常の食行動における母親の現状	27
1-4-1	日常の食に関するストレス	27
1-4-2	ストレス理論と食事に関するポジティブな側面について	31
1-4-3	日常の食行動と子育てについて	33
1-4-4	日常の食行動と家族関係について	36
第2節	研究の目的, 意義	38
2-1	研究の目的	38
2-2	研究の意義	39
2-3	本研究における定義	40
第2章	幼児のいる家庭における食の健康教育について	41
第1節	研究1 家庭の食育と調理に関する認知的評価との関連性の検討	41
第1項	研究1-1 家庭の食育尺度の開発	41
研究1-1-1	尺度開発の予備調査	43
研究1-1-2	本調査 家庭の食育尺度の開発と, 家庭の食育尺度の信頼性と妥当性の検証	48
第2項	研究1-2 家庭の食育と食に関するストレスとの関連性の探索的検討	57

研究 1-2 家庭の食育と食事に関するストレスとの関連性の探索的検討	58
第 3 項 研究 1-3 日常の調理に関する認知的評価に関する尺度の開発	66
研究 1-3-1 尺度開発の予備調査	68
研究 1-3-2 本調査 調理に関する認知的評価尺度の開発と、信頼性および妥 当性の検証	74
第 4 項 研究 1-4 家庭の食育と調理に関する認知的評価との関連性の検討	82
研究 1-4 家庭の食育と調理に関する認知的評価との関連性の検討	83
第 1 節 要約	100
第 2 節 研究 2 母親による家庭の食育、および、調理に関する認知的評価と、 諸要因（育児ストレス、子育てレジリエンス、夫からのソーシャル・サポート、 家族機能）との関連性の検討	102
研究 2-1 家庭の食育に影響を与える諸要因の検討	104
研究 2-2 調理に関する認知的評価に影響を与える諸要因の検証	120
第 2 節 要約	133
第 3 節 研究 3 家庭の食育と子どもの食行動、および、自尊感情との関連性の 検討	134
研究 3-1 家庭の食育と子どもの食行動の問題との関連性	135
補足研究 3-2 家庭の食育と子どもの自尊感情の関連性について	144
第 3 節 要約	153
第 4 節 家庭の食育モデルの作成と検討	154
第 3 章 本研究の総合考察と結論	164
第 1 節 総合考察	164
第 1 項 家庭の食育と育児ストレス、子育てレジリエンス、家族機能、夫からの ソーシャル・サポート、調理に関する認知的評価との関連性について	164
第 2 項 家庭の食育が子どもの心身に与える影響について	170
第 3 項 これからの家庭の食育について	171
第 2 節 結論	173

第3節 研究の限界と展望	175
引用文献	177
付記 本研究の基となった論文について	195
資料	196
資料 1	196
資料 2	200
資料 3	202
謝辞	212

論 文 要 旨

本研究の目的は、母親による家庭の食育と、家庭の食育を規定している諸要因との関連性を明らかにすることであった。

第一章では、食行動と発達、食育とその背景などの先行研究についてまとめながら、研究の意義と目的について述べている。

第二章では、幼児のいる家庭における食の健康教育について複数の調査研究を行うことで得た成果をまとめている。

まず、研究1では、インタビューによる聞き取り調査と質問紙法による調査によって開発した「家庭の食育尺度」を扱っている（研究1-1）。同尺度は、「食育意識」「食育実践」「食事に関する子どもの躰」の三つの因子で構成される結果となり、それをもとに、本研究における家庭の食育の定義を「食の健康教育を意識し、幼児に対して行う食の健康教育と躰」とした。この家庭の食育尺度を用いた調査データを分析した結果、多くの母親が食事に関するストレスを日常的に感じており、このストレスは家庭の食育と関連していることが明らかとなった（研究1-2）。次に、幼児の母親を対象に「調理に関する認知的評価尺度」を作成し（研究1-3）、家庭の食育と調理に関する認知的評価との関係について検討した（研究1-4）。この結果、調理の楽しさを向上させることで家庭の食育が促進されるが、調理の負担感が強いと家庭の食育の阻害要因となることが示唆された。また、調理に関する認知的評価が家庭の食育を規定している主要因の一つであることが示唆された。

研究2では、育児ストレス、子育てレジリエンス、家族関係、夫からのソーシャルサポート、調理に関する認知的評価などの諸要因と家庭の食育との関連性についての検討を行った。分析の結果、家庭の食育に直接的に関連しているのは、調理に関する認知的評価と家族機能であることが明らか

となった(研究2-1)。次に、家庭の食育に間接的影響を与えている要因を検討するために、育児ストレス、子育てレジリエンス、家族機能、夫からのサポート感と、調理に関する認知的評価との関連性が検討された(研究2-2)。分析の結果、育児ストレス、子育てレジリエンス、家族機能は、調理に関する認知的評価に関連していることが明らかとなり、家庭の食育とも間接的に関連している可能性が示唆された。

研究3では、食育と、食にかかわる子どもの問題行動や自尊感情などの心身の健康問題との関連性について検討された。この結果、家庭の食育によって子どもの食行動上の問題が減少することが示唆され(研究3-1)、食育と子どもの自尊感情の間に関連性があることが示唆された(研究3-2)。

最後の研究4は、研究1から研究3までの結果をふまえて、家庭の食育に関する因果モデルの作成と検討を行ったものである。分析の結果、調理に関する認知的評価、家族機能が家庭の食育に直接的に影響を与え、育児ストレス、子育てレジリエンス、家族機能は、間接的な影響を与えていることが確認された。

第三章では、第二章での調査研究の結果をふまえて、総合考察を行っている。最初に食育とこれに関連する諸要因・諸変数の関連性についてまとめたうえで、関連した事象について食育との関連性という観点から考察した。最後に食育についての展望や研究の展望などを述べて締めくくっている。

論文審査要旨

学位請求論文の提出後、主査および副査3名によって査読および審査を行った。食の健康教育を扱った先行研究は心理学分野では多いとは言えず、著書が目にした食育については、行政の立場からの定義等はあるが、学術的な定義自体なされていない。著者が食育尺度を開発し、それを通して本研究における食育の定義を行ったことは評価してよい。学外で対象者を得て行う調査には様々な困難が伴うが、大量の調査データを得られたことは、著者の努力のたまものである。研究に必要な心理尺度の開発から詳細な多変量解析に至るまで、データ分析はたいへん丁寧かつ詳細に行われており、この点は最も高く評価される。データ解析は細部に至るまで慎重に検討されており、統計学的にも十分に満足かつ信頼に足る結果が得られている。分析の結果だけでも大量にあるが、要所で要約が書かれており、読む者の理解を助ける工夫も見られる。食育に関連した心理・社会的変数の相互関連の分析は大変興味深いものであり、母親の心理・社会的サポートや子どもの心身の健康教育につながる示唆をたくさん含むものである。

なお本論文は、母親を対象とした家庭における食育の研究として優れているが、家族の実態・機能・役割は急激に複雑化し多様化している。今後はこの点をふまえて、研究をさらに発展させてもらいたい。

論文審査の結果、主査、副査は全員一致して、本学位請求論文が博士の学位を受けるに値する水準に達しており、著者は自立して研究活動が進めることが可能な能力を有していると判断し、合格とした。

口頭審査要旨

2014年7月19日13時00分より桜美林大学崇貞館H会議室にて公開試問審査が実施された。30分の口頭発表の後、30分の質疑応答が行われ、その後、主査と副査3名による最終審査を行った。

口頭発表は時間内に適切に説明され、質疑応答では、研究テーマの重要性、調査データの統計処理などについて高く評価する意見が述べられた。食育に関する心理・社会的なことがらが詳細、かつ多面的に検討されており、分析結果から食育の理解と促進、母親のサポートやこどもの健康教育への実践的応用などが期待されるものであった。

本研究では、母親に焦点を当てて食育について検討を行い、貴重な成果をあげているが、食に関する家族の機能・役割等は複雑、多様化していることが指摘された。今後はこの点をふまえて、研究をさらに発展させてもらいたいという期待が表明された。

以上の経過から、主査、副査全員が一致して口頭審査による最終試問は合格であると判定した。